

《翻 訳》

スペイン悲劇

トマス・キッド作

黒田 維訓訳

登場人物

アンドレア（スペインの貴族）の亡霊
復讐神

スペイン王

キプロスのカステイル公爵（王の弟）

ロレンゾー（公爵の息）

ベルイムペリア（その妹）

ポルトガルの太守

バルタザー（その息）

ドン・ペドロ（太守の弟）

以上がコロス

ヒエロニモ（スペイン軍の元帥）

イザベラ（その妻）

ホレイシヨ（その息）

スペインの將軍

同副將軍

老人・ドン・バズルト

三人の市民

ポルトガルの大使

アレグザンドロ

ヴィラツポ

ポルトガルの貴族

二人のポルトガル人

ペドリンガーノ（ベルイムペリアの召使）

クリストフィル（ベルイムペリアの後見人）

ロレンゾーの小姓

イザベラの側女

セルベリン（バルタザーの召使）

使いの者

首吊り役人

第一の默劇に三人の王と三人の騎士

第二の默劇に婚姻の神と松明を手に持った男二人

バザルド（画家）

ペドロとチャック（ヒエロニモの下僕）

軍隊、宴会、王の従者ら、貴族達、戟兵、士官數人、三人の見張兵、トラムペットを持つ伝令、召使ら

第一幕

第一場

〔アンドレアの亡霊と復讐神共に入る〕

亡霊 私はこの永遠の魂が、かつて多情の肉体に閉じ込められていた頃、つまり、それぞれが現実の世の中でその持つ機能を發揮していた頃には、私はスペインの貴族の一員であつたのだ。

私の名はドン・アンドレア、私の家柄は下賤とは言わないが、感じ易い青春の持つ恩恵あふれる運命に比べればはるかに劣っていた。全盛の頃には忠実な態度で、それに価する愛をこめて、ひそかにベルイムペリアという可愛い名の氣高い女性を恋していたからだ。しかし、夏の日の喜びが終り、死という冬枯れが私の倅せの華を摘み取り、恋人と私とを別れさせてしまった。

過ぎしポルトガルとの戦鬪に於いて、勇敢にも虎穴に入り、手負いの拳句には命を失ってしまったのだ。殺された時、私の魂は⁽¹⁾アケローンの流れを渡って黄泉の国へまっしぐらに流れ着こうとした。しかしそこには意地悪なカーロンが⁽²⁾たった一人で頑張っていて、葬儀が済まないうちはまだ舟に乗せる訳にはいかない、と言いくさつた。

太陽が⁽³⁾テティスの膝に三日も眠り、その洪水の中で煙立つ火車

を冷やしもしないうちに、元帥の息子、ドン・ホレイショが私の弔いをしてくれた。そこでアケローンの渡し守が⁽⁴⁾アヴェルナスの波の打ち寄せるつるつると滑り易い岸辺へ私を乗せて行ってくれた。そこには⁽⁵⁾ケルベロスがいて、甘い言葉で私を迎え、まずまずは最初の危地を逃がれたのである。

そこからさ程遠くない所に、⁽⁶⁾ミノス、⁽⁷⁾アイアカス、⁽⁸⁾ラダマントス⁽⁹⁾がいて、すぐさま私は彼らに近づき、さまよえる私の霊のために通行証をくれと頼んだ。しかしミノスは、運命の記載された帳簿の中から私の生と死を描いた模様を引き出してこう言った。「この騎士は愛に生き愛に死んだ。その愛のために戦運を賭けて闘った。そして戦運によって愛を失い、命を失つたのだ。」⁽¹⁰⁾アイアカスは言った。「それでは彼を我らの愛の野へ連れて行けばよい。そこで常緑の木と喪の木蔭で永遠の時を過ごさせよう。」⁽¹¹⁾ラダマントスは言った。「だめだ、だめだ。それはまずい。戦士を愛の魂の中へ入れるのはいけないことだ。彼は戦鬪で死んだのだから、戦いの野へ行かせるのがよい。そこなら⁽¹²⁾ヘクターも傷ついて永遠の苦悩に耐えているし、⁽¹³⁾アキレスの率いた⁽¹⁴⁾マーミドン達も野原をさまよっているから。」と。

そこで三者の中で最も温厚な検閲官、ミノスが異見を調整した。「彼を地下界の王の許へ送ろう。その身分にふさわしく決めて貰おう。」⁽¹⁵⁾こういうことに落ち着いて、私の通行証が出されたのである。プルートの法廷へ行く途中、真暗闇の夜の中を恐る恐る進むうちに、筆舌にも尽くし難い、生きた人間には思いも及ばぬ光景を見たのだ。

そこには三本の別れ途があつた。右側には前に言つた愛の野と、戦いの野があり、恋人達や、戦士らの魂がそれぞれ別々の区域の中をさまよっている。左側の途は、恐ろしいまでに傾斜していて、奈落の底へと続いている。そこには復讐⁽¹³⁾の三女神が鉄の筥を振るっている。あわれなイクシオン王がいつ果てるともなく車を廻している。またかつての高利貸が融けた金の中で窒息させられ、色情に狂つた者達が醜い蛇に絡まれ、殺人者は消え去らぬ傷にうめき、偽証をした者は煮え沸る鉛で火傷を負い、けがれの罪を犯した者達も苦しみに喘いでいる。

これら二つの間にある途を私は歩いて行つた。そこは美しい緑に満ちた極楽であつた。その真只中には堂々たる塔が聳え立ち、真鍮の壁、こわれることのない門が見える。ここにプルトーとプロセルピナを見つけて、私は通行証を見せたのだ、跪きながら。それを見たプロセルピナはにっこりと微笑み、彼女だけが私の運命を決めてあげられるとプルトーに言つた。プルトーは喜び、接吻をしてそれを認めてくれた。直ちに復讐神である貴女の耳許に彼女が囁いて、角の門から私を連れ出して行くようにと命じた。そこは静かな夜に正夢が通る所なのである。彼女が囁くや否や私はここに居た。一瞬のことで、どうしてここへやって来たのかもわからなかつた。

復讐神 さてアンドレアよ、汝は汝を死に至らしめた者を見る場所へやって来た。ポルトガルの王子・ドン・バルタザールが、ベルイムペリアに殺されるのを見る場所へやって来たのだ。ここに坐つて芝居を見物し、この悲劇のコロスの役目を果すことにしよう。

第二場

〔スペイン王、將軍、カスティル公、ヒエロニモ入る〕

王 どうだ將軍、わが陣営はどうしている。

將軍 陛下、うまく行つて居ります。ただ二、三の者が戦闘で命を失つたこと以外はうまく行つて居ります。

王 お前の顔の微笑みは一体何の徴候だ。こんなにせかせかと余の前へ出て参つたのは。話せ、早く。幸運が我らの軍隊に勝利をもたらしたのか。

將軍 陛下、勝ち戦でございます。損害も少うございました。

王 それではポルトガルが我らに貢ぎ物を捧げるといふのだな。

將軍 貢ぎ物も参りますし、その上忠誠をも誓うことになりました。

王 神々も照覧あれ。天の正義が貫かれたのだ。

カスティル公 おお、神の御恵みよ。神々が貴方のために闘つて下されたのでしよう。呪われた人々を跪かせたのです。勝利は真に正義の味方ですからね。

王 有難う、カスティル公の愛する弟よ。

だが將軍、戦闘と勝ち戦の模様を手短かに語ってくれ。以前にもまさる倖せに、汝の勝ち戦の話を加えて、更なる報酬と一層の威厳を込めて、汝の幸運の勇氣に報いるためにもな。

將軍 スペイン軍とポルトガル軍が国境で会戦致しました。お互いに進みもせず引きもせずにいる所へ、敵勢が戦闘隊形をとつて勇敢にも攻撃をかけて参りました。両軍共、備えは充分、恐れと同

時に期待をも抱いて居りました。両軍共に大胆に振舞い、様々な騎兵隊の旗を打ち立て、軽やかに喇叭を響かせ、太鼓を叩き、横笛を吹き鳴らし、天にも届けと騒音をかき立てて、谷間も、丘も、河へまでもその音がとどろきわたりました。天すらもその音に驚いているようにございました。お互いの主力は方陣を組んで激しく闘いました。いずれの隊形の一角にも、弾丸が雨や霰と飛んで参りました。しかしお互いの軍隊が入り交じって闘いに入ろうとする前に、私は後方に陣取ってすでに発砲の準備をしていた一中隊を戦闘につかせることに致しました。別の方から敵の羽翼が我々の方へ攻撃をかけて参りました。その間に我が方の大砲が両面から攻撃をかけていました。隊長達は勇敢に敵に向かって進もうとしていました。

ドン・ペドロ、敵方の騎兵聯隊長が、自分の部下を引き連れて、我が方の戦闘隊形を打ち破らんものと、勇敢にも攻め込んで参りました。しかし、気高い戦士、ドン・ロゲロが彼に向かって銃士を従え接近し、その恐るべき接近の意図を粉碎したのであります。

激しい戦闘が続いている間に、両軍は入り交じって白兵戦となりました。両軍の弾丸はさながら大洋の荒れ狂う姿にも似て、さまざまの音響を轟かせ、大波のように巨岩の防壁を襲い、うねるように続いている地面に大きな穴を明けたのであります。ここに⁽¹⁸⁾ベロナ女神が荒れ狂い、冬の霰みたいに弾丸は飛び交い、飛び交う槍は騒乱を極めた四辺に夜のとばりを下ろすほどでございました。

⁽¹⁹⁾足と足、槍と槍は交叉し、鎧は鎧にぶつかり合い、人は人に襲われました。

どこにもここにも隊長らが地面に倒れ、兵士のあるものは片輪になり、ある者は即死し、胴から離れた首がそこらにごろごろ、足や腕は草原に血まみれになって転がり、武器や、腸のとび出た軍馬と混じり合い、平原を緋色に染めて散らばっていました。この混乱のまま、長い長い三時間もの闘いが続き、いずれに軍配が上がるかも判然としませんでした。遂にドン・アンドレアが、勇敢なる部下の槍騎兵をひき連れて、激戦の部分の敵陣を打ち破りました。半ばたじろいで敵の大軍は退却をして行つたのでございます。しかしポルトガルの若き王子・バルタザーが援軍に到着し、逃げる兵士達を叱咤して止まらせました。ここに於いて、闘いはまたしても激しさを加え、その闘いのさ中にアンドレアは打死にされたのです。武器を取っては勇敢なアンドレアも、バルタザーの敵ではなかったのです。一方、バルタザーはいえ、アンドレアの死体に打ちまたがり、勝ち誇ったように我々の方へ名乗りをあげていました。

友情と勇氣に駆られ、わが方の元帥の子息、ホレイシヨが、バルタザーとの一騎打に飛び出して行きました。二人の闘いはさほど長くは続かず、とかくするうちにバルタザーは馬から打ち落とされました。そこをすぐさまホレイシヨに捕えられたのであります。王子が捕虜になるや、敵の軍勢は一斉に逃走致しました。わが方の銃撃兵が逃げる敵兵を壊滅させました。

太陽が西の空に傾く頃、トラムペットを吹き鳴らしてわが方の

軍隊もひとまず退いて参りました。

王 有難い、こんなよい報せをしてくれて。後ほど恩賞はとらせるが、ひとまず余の感謝の印としてこれを取っておけ。

〔將軍に鎖を渡す〕

しかし、和議は整ったのか。

將軍 まだでございます、陛下。条件付きで和議を整えました。忠節を誓う貢ぎ物が十分に納められたらわれらの怒りも収まるであろうとおきました。太守がこの用紙に署名を致しましてございます。

〔王に書類を渡す〕

そして嚴肅のうちに将来にわたって貢ぎ物がスペインに納められることを誓わせました。

王 これはでかしたぞ。汝にふさわしい所行であった。

さて、元帥、余は嬉しいぞ。汝の息子がこの勝ち戦の賞を受けるのじゃ。

ヒエロニモ 生き存^{なから}えてわれらの王に仕えますように。さもなくばホレイシヨに死を！

〔トラムペット華々しく吹奏〕

王 汝にも、汝の息子にもきつと褒美をとらせるぞ。このトラムペットの吹奏は一体何事じゃ。

元帥 戦場で勇敢に闘い生き抜いた兵士達が帰って参ったのでございます。王に拝謁を願う為に。私がこちらへ参る際に申し付けて参りましたから。御覧になればおわかりのように、三百余名以外はすべて生き残りまして、しかも敵の武器、弾薬を分捕って帰っ

て参りました。

〔軍隊入る。ロレンゾーとホレイシヨの間に捕虜のバルタザー入る〕

王 何と喜ばしい事だ。これ待って居ったのじゃ。

〔彼ら入り、通過する〕

あれが戦好きのポルトガルの王子か、余の甥に連れられている男が。

元帥 あれがポルトガルの王子でございます、陛下。

王 向う側で彼の腕を掴んでいるのは一体誰じゃな。

ヒエロニモ あれが私の息子でございます、陛下。幼い頃より息子の息災をのみ願って参りました。これまで父親を楽しませてくれたことはございません。私のこの胸に、あふれる喜びを満たしてくれたことはありませんでした。

王 さあ、もう一度この壁の前を歩かせよ。ここに止めて、あの勇敢なる王子と二人の衛兵をこれへ連れて来て話をさせよ。

ヒエロニモ、余の勝利については、汝の息子の勇敢なる行為によつて、汝にも余の喜びを分け与えねばならんな。

ポルトガルの若い王子をこれへ。

〔隊列戻つて来る〕

他の者に行進させよ。ただし、解散前に兵士一人一人に二ダケット、各指揮者には十ダケットを与えて、余の感謝の念を表明するとしよう。

〔バルタザー、ロレンゾー、ホレイシヨ以外の兵士らは退場〕

ようこそ、バルタザー王子。余が甥のロレンゾー、よく帰った。それにホレイシヨ、よくぞ勝って帰って来たな。

王子よ、納めなければならぬ貢ぎ物を控えたあなたの父親の不実な行為が、我らの軍隊を動かすことにはなったが、スペインは名誉を重んずることを知っておかれるがよい。

バルタザー 私の父の犯した罪が平和のうちに、戦争の運によって抑えられました。一旦配られたカードはどうしようもございませぬ。部下は殺され、彼の王国は弱まりました。軍旗は奪われ、名に汚辱が加えられました。その息子の私は捕虜となり、胸は張り裂けることとなるでしょう。こうして制裁が加えられれば、彼に對するさきの不信もすっきり致すこととございましょう。

王 バルタザー王子よ、そなたの父がもしこの要求を守ってくれば、この闘いは終り、我が方との平和はより強固なものになるであろう。そのあいだ、自由という訳には行かずとも、捕虜としてのあらゆる軛からは逃がれて、ここで生活をされるがよい。聞くところによれば、そなたの振舞いは立派なようだし、見たところそなたは卑劣ではないようだから。

バルタザー 王の御期待に添うように努めます。

王 しかし、待たれよ。二人のうちのどちらがそなたを捕えたのかわからぬ。一体どちらがそなたを捕えたのであろうかな。

ロレンゾー 陛下、私が捕えました。

ホレイシヨ 私めがでございます、陛下。

ロレンゾー この手で彼の馬の手綱を握まえました。

ホレイシヨ しかし、私めの槍でまず彼を馬から落としたのであり

ます。

ロレンゾー 私が彼の武器を押さえ、それをもぎ取りました。

ホレイシヨ 私がさきに彼の武器を奪ったのであります。

王 彼の腕を離してやれ、私の名で。

〔二人は手を離す〕

さあ、王子よ、いずれの者の捕えるところであつたか。

バルタザー 礼に於いては前者に。力に於いては後者にございませぬ。彼はいんぎんに話をしました。向うは私を叩きました。彼は命を約束しました。向うは殺すとおどかしました。彼は私の氣に入り、向うは私を征服したことになります。真実を言えば、両者の捕虜となつたのであります。

ヒエロニモ 陛下の恩恵を正しく、間違ひなく私が知り、この相違に不公平がないようにするとすれば、まして、自然と戦争の法則に則つてみれば、やはりホレイシヨの方に軍配が上がりそうでございます。ライオンを殺した者が上手な狩人であり、その皮を着た者は狩人ではございません。野兎だつて死んだライオンの髭をくわえて死体を引つ張ること位はできますから。

王 わかった。元帥、お前の言うことに間違ひはない。お前の息子に資格がないという訳ではない。余の決定を二人共受けてくれるか。

ロレンゾー 王様にお任せ致します。

ホレイシヨ 私めもそう致します。私の権利などはどうでもよろしゅうございます。

王 それではこの件は、余の判断によつて落着させるとしよう。汝

ら二人がその権利を有する。二人共に報酬を与えよう。
甥よ、彼の馬と武器を取れ。彼の馬と武器をお前の報酬としよう。

ホレイシヨ、汝が彼をさきに捕えた。従ってその身代金をもって汝の報酬としよう。両方が納得行くように金額を定めるがよい。
しかし、ロレンゾー、お前は王子を護衛せよ。お前の邸がこの客人にはふさわしいからな。ホレイシヨの邸では一行を入れるには少々狭すぎる。しかもお前の財産が彼の財産にまさっているから。正しい功績にはそれなりの報酬があるものだ。彼には王子の甲冑を与えることにしよう。

バルタザー王子、この判決ではいかがなものであろうかな。

バルタザー もしドン・ホレイシヨがこの条件で満足されるのなら、結構です、陛下。彼は私の尊敬する勇士ですから。

王 ホレイシヨ、あんな風に言っているのだ。聞いてやれ。

さて、兵士に金を分け与えているところを見に参ろう。捕われた人々を客人としてもてなしてあげろ。

〔退場〕

第三場

〔太守、アレグザンドロ、ヴィラッポ入る〕

太守 大使はもはやスペインへ向かって出発をしたのか。

アレグザンドロ 閣下、二日前にもはや。

太守 では、貢ぎ物と身代金は持参したのじゃな。

アレグザンドロ 左様でございます。

太守 それでは不安のうちにもしくはらくは安心できるというものじや。それにわれらの心の歎きを内面の溜息でも慰めておこう。
余り心配が過ぎると涙も出なくなるからのう。一体何故私はこの王座に坐っているのだらう。今のこの気持は恥知らずの果てでもない歎きにこそふさわしいものであるのに。

〔地面にひれ伏す〕

これでもまだわが運命の価値に比べれば高すぎよう。それゆえ、わが太守としての威厳に比べればまだましな位だ。おお、この大地よ、憂うつ化身よ、運命が悲惨のドン底へ叩き落した人間を見てください。ここにひれ伏すこの私を、これほどの低きにいるこの私を。

⁽²⁰⁾ 地面にひれ伏す者にはもはや倒れ込む場所もない、運命の女神が我々に悪運を注ぎ込んだのだ。

大いなる災いは貯えられたままになっていることはない。

そうだ、運命の女神が私の王冠を私から奪うであろう。さあ、持つて行ってくれ。どんなに残酷でも、私のこの喪服まで奪うことはあるまい。いやいや、楽しみだけを女神は欲しがるのだ。これこそ運命のいたずらなのだ。

女神は盲目なのだ。私の美点も見逃がしている。

女神はまた、つんぼなのだ。私の歎きも聞いてくれない。

仮りに聞こえても、彼女はどうかしている。私のみじめさなどには憐みもかけてくれない。仮りに憐んでくれたとして、何だというのだ。彼女の手に何を期待できるというのだ。その足は転がり廻る石の上に乗っかり、気まぐれな秋風同様に移ろい易い心の持

ち主だから。

それなのに私はこうもわめき散らしている。救われる望みもないというのに。ああそうだ、ぶつぶつ言っていれば悲しみもいくらか和らぐかもしれぬ。先頃の野心のために私の信用も地に落ちてしまった。私の汚れた信用のために血なまぐさい戦闘が行われた。その血なまぐさい戦闘に財宝を使い、それと共に人民の血も流された。彼らと共に私のこよなく愛する息子をも失ってしまったのだ。ああ、何故自ら戦場へ赴かなかったのか。その原因は私にあった。私こそ息子や人民に代わって死ねばよかったのだ。私は年をとっている。息子はまだ若く将来がある。私が死ぬのは自然の理にならっている。息子は無理矢理に死なされたのだ。

アレグザンドロ 大丈夫でございますよ。閣下、王子は生きて居られますよ。

太守 生きてるって。おい、どこにだ。

アレグザンドロ スペインにですよ。戦争のふとしたはずみで捕虜となつてでございます。

太守 それでは父親の代わりに殺されよう。

アレグザンドロ 戦争中の法によればそれは違反となります。

太守 復讐を思う者に法など考えられるものか。

アレグザンドロ 身代金の出し方次第では復讐など致さないでありますよ。

太守 いや、もし生きて居れば、もうこちらにわかつて居る筈だ。

アレグザンドロ いいえ、悪い報せの方が良い報せより早いものでござ

いますからね。

太守 これ以上の知らせはもう要らぬ。伴は死んでしまったのだから。

ヴィラッポ 閣下、悪い知らせを作った者をお許し下さるよう。私

めが御子息の運命をお知らせすることに致します。

太守 話してくれ。どんな知らせでもかまわぬ。悪い知らせですらも聞く耳の用意はあるから。運命のいたずらに私の胸はそれを耐えることもできる。さあ、詳しく話してくれ。

ヴィラッポ それではこの私の眼で確かに見た真実をお聞き下さい。両軍が戦闘を交じていた時、ごたごたした群衆の中に居られた御子息のバルタザールは、名声を得んものと勇敢に闘って居られました。他の群の中から私は、彼が敵の將軍と一騎打をして居られるのを見ました。そこを、ここに居りますアレグザンドロが、忠義の友という口実の下に將軍を殺したいとも言わんばかりに、御子息の背中へ向かつてピストルを発射したのでございます。しかもそれによって御子息は倒れ、倒れる時に私共は逃げ出したのです。しかし、もし彼が生きて居られたら、勝利はきっと我々の手にあつたでございましょう。

アレグザンドロ おお、何ていんちきな作り話だ。極悪非道の裏切者だ。

太守 黙れ。しかしヴィラッポ、それでは伴の死体はどうなったのだ。

ヴィラッポ スペイン側の幕舎へ引きずって行くのを私は見届けました。

太守 そうだ、夜毎の夢に私はそれを見たのだ。

アレグザンドロ、お前は何と不誠実な、不人情で、恩知らずの裏切者なのだ。一体倅が何をしたら彼に反逆したのだ。我が方のためを考えることがなかったというのは、スペインの金貨の輝きがお前の眼をくらませでもしたのか。多分お前はテルセーラ島⁽²¹⁾の持ち主だから、まず私の倅が、次にこの私が死にでもしたら、王冠を自分の頭上に輝かせようとでも望んでいたのか。お前のその野心でお前のその首をへし折ってやる。これだったのか。お前にわしの倅を殺させたものは。

〔王冠を脱ぎ、また頭上にのせる〕

待てよ、お前の血が流れるのを見るまではこの王冠をかぶっておくぞ。

アレグザンドロ お待ち下さい。私の話もお聞き下さい。

太守 奴を追っ払え。奴など二度と見たくもないぞ。奴の死刑を決めるまでブチ込んでおけ。バルタザーが死んだのなら、あいつも生かしてはおかぬから。ヴィラッポ、報酬をとらすからついて参れ。

〔太守 退場〕

ヴィラッポ ざまあ見やがれ。うまいこと王を欺いてやったぞ。好敵手を裏切って俺の悪計の報酬でも貰うとするか。

〔退場〕

第四場

〔ホレイシヨとベルイムペリア入る〕

ベルイムペリア ホレイシヨ様、ここへ、こんな時にお呼び立て致し

ましたのは、ドン・アンドレアの死に様をお話し願うためなのです。生前の彼を、私はこよなく愛して居りました。今はもう、彼に死なれてしまつて、私の楽しみはなくなつてしまいました。

ホレイシヨ 彼に対する愛と、貴女への義務感から、この悲しい役目を避けるつもりは私にはありません。

敵味方が入り混じつて闘っていた時、貴女のアンドレアは敵の真只中に入り込んで、栄光あふれる勇敢さで遂にドン・バルタザーと一騎打を演ずることになりました。その二人の闘いは長いこと続き、二人の勇猛さはたとえようもなく、二人の武器の触れ合う音はすさまじく、力は対等で、いずれが打ち込んであわやと思われました。しかし激怒したネメシスは例のよこしまな魔力を用いて、アンドレアを賞め讃える声と彼の値打に羨望の念を抱いて、それを止めようと彼の命を絶つたのでした。ネメシスは鎧姿に身を隠して、⁽²³⁾（パラスが誇り高く聳え立つ⁽²⁴⁾ベルガムスの前に立ったように）戟兵の新手を送り込みました。彼らはアンドレアの乗馬の腹を突き破つて彼を地上に落としたのです。

その時若いドン・バルタザーが情容赦もなく猛威を振るつて、敵なるアンドレアがひるむ隙につけ込み、戟兵がしかけた仕事に仕上げをし、アンドレアの息の根を止めたのです。それから遅ればせながら、私は悲しみをふり払つて部下と共に王子の跡を追いました。そして戟兵の群の中から彼を捕虜にして参りました。

ベルイムペリア 私の恋人を殺した彼が貴方に殺されていたらよかったのに。しかしそうしていれば、彼の死体がどこへ行つてしまふかわからなかったのでしょうか。

ホレイショ そんなことはありません。その為に私は闘ったのでした。彼の死体をまた見つけ出すまでは私は引き退りませんでした。彼を持ち上げて、私の腕で抱きかかえ、私の天幕まで彼を運び、その場におろして、涙にくれ、友人にふさわしく歎き悲しんだのです。しかし友情から来る悲しみも、歎きも、涙も、死という現実をどうすることもできませんでした。しかも、私は、これだけのことはしたのですが、これ以下のこともできませんでした。分相応の葬儀がとり行われるのを見ました。このスカーフは、命を失くした彼の腕からとり外して、友人の思い出に使わせて貰っているのです。

ベルイムペリア そのスカーフのことは覚えています。彼に今でもそれを使っているとは思いませんわ。生きていればそうして、ベルイムペリアの為に肌身に離さずいたことでしょうに。最後の別れに私が彼に贈ったものでしたからね。しかし、今となっては、彼と私の為に、貴方がそれを身に着けていて下さいませね。彼の形身としては、貴方が最もふさわしい方ですからね。彼の生前、死後を通じて貴方は親切でしたし、私の命の続く限り、私は貴方に感謝を捧げる友達でいますわ。

ホレイショ それに私、ドン・ホレイショも、美しい貴女・ベルイムペリア様に友情を捧げさせて頂きます。しかし、これ位でお許し願えば、ポルトガルの王子を探しに参りたいと思うのです。貴女の父上・カステイル公がそうお命じになりましたので。

〔退場〕

ベルイムペリア いらっしやって下さい。ホレイショ様。私はここに

ひとりで残ります。今の私の悲しい身には孤独だけが最もふさわしいからです。しかし、アンドレアが死んだということは、一体どういうことになるのかしら。そのためにホレイショが私の次の恋人になるのかしら。彼がアンドレアをあれほど愛してくれていなかったら、このベルイムペリアの胸の中に入り込んで来ないでしょうに。

だけど、私は恋人の仇を復いるまでは恋の痛手をどうやって抑えることができよう。そうだ、新しい恋人ができれば復讐も早まろうというものだわ。アンドレアの友人・ホレイショを愛しましょう。アンドレアを殺したポルトガルの王子を一層苦しめてやるのです。

私の恋人を殺したドン・バルタザールが私の手中に慈悲を求めている時、私は彼を軽蔑して、彼の殺害行為をいつまでも後悔させてあげましょう。卑怯者の殺人でなくて何でしょう。たった一人の勇者を大勢の力で倒すなどとは。一対一の闘いという名誉もなしに倒したのですもの。

あそこに私の恋人を殺した人がやって来るわ。

〔ロレンゾーとバルタザール入る〕

ロレンゾー 妹、憂うつそうに歩いているが、一体どうしたというのだい。

ベルイムペリア しばらくは誰とも御一緒したくないのですわ。

ロレンゾー しかし、王子がお前に逢いに来られたんだよ。

ベルイムペリア それはあの方が自由に生きていらっしやるということよ。

バルタザー それは違います。ただし、捕虜とはいえ喜んでいます。ベルイムペリア それでは貴方の牢獄は、多分貴方の空想なんですわ。バルタザー しかし、空想によって私の自由は縛られているのです。ベルイムペリア それでは、空想によってもう一度貴方の身を放免されたらいかが。

バルタザー もし恋の想いが、私の心に何か補償をしろと命じたらどうしますか。

ベルイムペリア 借りたものを返すのですわ。そして取り戻したらよろしいのです。

バルタザー それがそのあり場所から戻って来たら、私は死んでしまいます。

ベルイムペリア 心のない人が、生きているのですか。奇蹟ですわね。

バルタザー そうです。恋はいろいろの奇蹟を生むものです。

ロレンゾー さあ、さあ王子、もって廻った言い方はやめて、はっきりと貴方の愛を彼女に告白なさい。

ベルイムペリア 治すこともできないくせに、ブツブツ言っても何の役にも立ちませんわ。

バルタザー そうなのです、貴女に向かって私はいろいろ言葉を並べ立てなければいけないのです。その返辞の中に私を治す薬があります。私の思いはすべて、完璧な貴女に傾いているのです。私の眼は貴女の美しい姿に美の住み家を見つけたのです。私の心は貴女のほのかに透きとおった胸に宿っているのです。

ベルイムペリア 悲しいことです。王子さま、お世辞ばかりを仰言っ

て、ここから私を追い出そうとなさるだけですのね。

〔退場する時手袋を落とす。出かったホレイシヨがそれを拾い上げる〕

ホレイシヨ 手袋が落ちましたよ。

ベルイムペリア どうも有難う。親切なホレイシヨ様。御苦労ついでにそれはお持ちになって。

バルタザー セニョール・ホレイシヨ、いい時に身をかがめましたな。

ホレイシヨ 身にあまる光栄にも浴しました。

ロレンゾー 王子、過ぎてしまったことをくよくよと考えなさるな。女は気紛れなものですからね、一寸した風でも吹けばすぐに吹っ飛びますよ。私に任せて下さい。私が貴方の心の曇りを払いのけてあげますからね。そして何か楽しい遊びや催しでもやって、時間潰しを考えましょう。

ホレイシヨ 皆様、王がやがてここへいらっしゃいます。ポルトガルの大使を歓迎するための用意は整いました。

バルタザー ではここで王様に拝見しましょう。私の方の大使を迎えて、父上のことやら国のことなどを聞きましょう。

第五場

〔宴会の席、王と大使、トラムペットの吹奏〕

王 ポルトガルの大使殿、捕虜となられた太守の息・バルタザー殿の待遇を御覧になったかな。戦争よりは平和の方が楽しいことも多いことでしょうて。

大使 われらの王は悲しみに閉ざされて居ります。バルタザー殿下は殺されたと思われて居りまして。ポルトガル国も、国中の者が歎いて居ります。

バルタザー 美人という専制君主に殺されたのだよ。ね、バルタザーが殺されていることがわかるだろう。私はカステイル公御息のロレンゾー殿と宮廷生活の楽しさを満喫して、王様の恩恵の下で楽しく遊び廻っているよ。

王 さあ、挨拶は後回しにして、まずは食事に行きましょう。坐席に着いて、馳走をおとりなされ。

〔皆宴席に着く〕

お掛けなされ。若い王子、主賓ではないがお客様には違いない。

カステイル公も坐れ。ロレンゾーも座に着きなさい。

ホレイショ君、われらの盃に酒を注いでくれ給え。君がその役目にふさわしいからだ。

さて、諸君、始めよう。スペインもポルトガルもない。我々はすべて友人なのだ。貢ぎ物も支払われ、昔通りとなったのだ。元帥のヒエロニモは一体どこに居るのじゃ。彼は余に約束をした。お客様を迎えて何か素晴らしい催し物を見せてくれることになったのじゃが。

〔ヒエロニモ太鼓を持ち、三人の騎士それぞれに楯を持つて入る。それからヒエロニモ三人の王を連れ来る。三人の騎士それぞれ王冠を取り彼らを捕虜にする〕

王 ヒエロニモ、この仮面劇は楽しそうだ。もっとも何が起こるかわからんがの。

ヒエロニモ 第一の鎧を着た騎士が楯を捨てました。

〔彼はそう言うのと楯をとり王に与える〕

この人はグロスター侯、ロバートです。ステイヴン王がブリテン島を支配していた頃、二万五千の兵士を率いてポルトガルにやって参りまして、戦運に恵まれ、サラセン人の王を英帝国の下に隷属せしめたのであります。

王 ポルトガルの大使殿、これによってそなたも、そなたの国王も、心が慰められて、今回の不愉快さも少しは減じたことであろう。だが、次は何じゃ、ヒエロニモ。

ヒエロニモ 第二の騎士が楯を捨てました。

〔前と同じく楯を王に与える〕

これはブリテン島のケント侯で、エドマンドと申します。リチャード王がブリテンに君臨していた頃、やはり彼もリスボンの城壁を破り、ポルトガル王を闘いで召捕りました。その他にもそのような手柄をたてましたので、後程ヨーク公にも叙せられました。

王 これはまた、小さなイングランドにポルトガル国が降伏したことを考えると、我がスペインにもうやうやしく従うことができる証拠でもあるよのう。

ところで最後のものは一体何じゃな。

ヒエロニモ 三番目で最後ではありますが、それだから重要ではないという訳ではございません。

〔前二者と同様に楯を王に渡す〕

これは前者同様、勇猛果敢な英国人、ランカスター公・ゴーン

トのデヨンであります。楯を御覧になればよくおわかりと存じます。彼は強大な軍隊を率いてスペインへ攻め入り、カステイルの王を捕虜にした男です。

大使 これはわれらの太守にぜひお伝えせねばなりません。英国の戦士達がスペインを征服してアルビオンに跪かせた歴史にも拘らず、この際スペインが勝利におごらぬ証拠かと存じます。

王 ヒエロニモ、この工夫された黙劇に乾杯だ。大使も、余も満足に思うぞ。汝がこの王のことを愛して居るなら、どうか余のために乾杯をしてくれ。

〔ホレイシヨから杯を受けとる〕

さあ、大使殿、いたずらに坐り続けていても御馳走がますますなくなりますぞ。どうぞ、一番美味しいものを食べて下され。そろそろ調印の準備もできていましょう。さっさとそれを片付けましょう。

〔全員退場〕

第六場

〔アンドレアの亡霊と復讐神〕

アンドレア 死の門出の傷口を与えた私の敵がもてなしを受けているのを見る為に、私は地下の深みからわざわざ出て来たのか。ここの楽しそうな風景も、私の魂にとっては悲しみ以外の何ものでもないわ。友好を約束する調印も、愛も、宴会もだ。

復讐神 まあ、待て、アンドレア、ここを去る前に、彼らの友情を私が強力な憎しみに変えてあげよう。彼らの愛を命にかかわる憎しみに。彼らの明るい昼を暗黒の夜に。彼らの希望を絶望に。平

和を闘いに。喜びを苦悩に。倖せを悲慘に変えてやるからな。

第二幕

第一場

〔ロレンゾーとバルタザー入る〕

ロレンゾー 王子、ベルイムペリアははにかんでいますから、どうか理性を働かせて、いつものように落ち着いて下さい。いずれは粗暴な牛でも軋につくものです。馴れない鷹でも、いずれは餌つけができるようになるものです。小さな楔がそのうちには堅い樫の木を切り裂くものです。冷酷無情の心も、そのうちにはこよなく柔い慈雨のような心に溶け去るものです。彼女だって、あの尊大な気持がくずれて、貴方の胸の恋の思いを受け入れておけばよかったと思うようになりますよ。

バルタザー いや、彼女は獣より、鳥よりも、木より、石の壁よりも無情で、それだけに厳しいところがある。しかし何故、私はベルイムペリアの名に傷をつけたのであろう。軽蔑されるべきは彼女ではなく私なのだ。私の容貌は彼女に比べれば及びもつかない。言葉は野卑だし、彼女に何の喜びをももたらすことができない。私が彼女に送った手紙は⁽²⁷⁾パンとマルシャの笛の⁽²⁸⁾かもし出す楽の音にひとしく、耳ざわりでまずい響しかない。私の両親には充分な価値もなく、私の努力も空しく費されるだけであらう。しかし、彼女が私の勇気を愛してくれればなあ。ああ、それも捕われ

の身となった今ではもう役に立たぬ。しかし、カステイル公の為に私を愛してはくれぬものか。それも彼女の理性に抑えられてしまっただろう。彼女の望みは誰か他の人の上にありそうだ。彼女の威厳を増す為に私を愛してはくれぬだろうか。いや、しかし、彼女は誰かもっと高貴の人を望んでいることであろう。彼女の美貌の奴隷として私を愛してはくれぬものか。しかし、彼女に私を愛してくれる意志はあるまい。

ロレンゾー 王子、私に免じて、今のその気持をお静め下さい。何か妙案を探し出せるでしょうから。彼女が貴方を愛さないというのは、何か理由があるかもしれません。まずそれを探り出してから、その後でそれを取り除けばよいのです。誰か他の騎士を妹が愛していたら、どうしますか。

バルタザー 夏の日のように明るい私の心は、真暗な冬の夜とも変わるであろう。

ロレンゾー この曖昧な点を打診する為、私はすでに一計を案じて居ります。此の度のことは私にお任せ願って、王子、何を聞き、何を見られても、私には一切かかわらずにおいで下さい。このことはいかなる手段を用いまでも私めが探り当ててごらんに入れます。

オーイ、ペドリンガーノ。

ペドリンガーノ はい、旦那様。

ロレンゾー すぐにこちらへこーい。

「ペドリンガーノ入る」

ペドリンガーノ 旦那様、何か御用で。

ロレンゾー おお、ペドリンガーノか。大切な用件だ。余計なことは省いて、早速話をしよう。お前も知つての通り、父上の怒りをなだめてお前を救ってやってからまだ間もない。アンドレアの恋の使者となって、その為にお前は罰されそうになっていたな。その間に入ってやった私が、お前の為に一体何をしてやったかお前は覚えておろうな。そこでだ、その上にお金をたんまりくれてやるうと思つてゐるのだ。綺麗な言葉だけでなくてな。土地も生計費も一層増してやることもできる、お前が私の言うことを聞きさえすればの話だな。

誓え、この私に永遠の忠節を尽くす、と。

ペドリンガーノ 何をお命じになろうとも、もし私が真実のことを知つて居りさえすれば、旦那様に対しては真実を語ることを義務と心得て居ります。

ロレンゾー では、ペドリンガーノ、私の質問はこうだ。妹・ベルイムペリアは一体誰を愛しているのか。妹はお前をすっかり信用しているようだからな。言え、そして友情と報酬を共に受けよ。つまり、妹はアンドレアの後、誰を愛しているか、をだ。

ペドリンガーノ それはまあ、旦那様、アンドレア様がおなくなりになった後では、以前のように信用を頂いて居りません。だからお妹様が恋をしていらつしやるかはわかり兼ねますが。

ロレンゾー 言え、ぐずぐずしていると、お前は私の敵となつてしまふぞ。

「劔を抜く」

友情ではから取れぬものを、恐怖が与えてくれることになるぞ。

お前の命はなくなって、妹を尊敬することがお前の死につながって来るぞ。

ペドリンガーノ まあ、旦那様、お待ち下さい。

ロレンゾー それなら真実を申せ。そうすればお前に褒美もやろう。何事についてもお前をかばい、お前の口から出る言葉はすべて内緒にしておいてやろう。

しかし、ぐずぐずしていると、お前を殺してしまうぞ。

ペドリンガーノ もし、ベルイムペリア様が恋をしていられるとすれば……

ロレンゾー 何だと、こやつ、もし、だって。

〔殺そうとする〕

ペドリンガーノ あれっ、旦那様、お待ち下さい。彼女はホレイシヨ様を愛しておられます。

〔バルタザーびっくりして飛びのく〕

ロレンゾー 何と言った。ドン・ホレイシヨ、我らの元帥の息子をか。

ペドリンガーノ まぎれもなくあの方をでございます。

ロレンゾー 一体どうしてあいつが妹の恋人であるかがわかったのだ。それを言え。私はお前を寛大に、親切に扱ってやるからな。立ち上って、恐れずに真実のところを申せ。

ペドリンガーノ お妹様があの方に手紙を送られました。それを私めがちらっと読みました。愛の言葉が、真実の心が一杯書かれていました。バルタザー王子様よりもホレイシヨ様を愛している、と。

ロレンゾー この劔の柄にかけて、お前の言った事は真実であると

誓え。そして今お前の言った言葉は絶対他言をしない、とな。

ペドリンガーノ 両方共に誓います。神にかけて。我らすべての創造者にかけて。

ロレンゾー お前の誓いが真実であればよい。さあ褒美だ。しかしもしお前が偽って、嘘を申したのであれば、お前が誓いをかけたこの劔でお前の命を貰うことにするぞ。

ペドリンガーノ 私の言った事は真実であります。私に関する限り、ベルイムペリア様にはどうぞ御内聞に願います。その上貴方様に頂戴致します名誉ある贈物は、私の義務としての働きに、死ぬまでも値すると考えます。

ロレンゾー 私の頼みというのはこうだ。つまり、気をつけておいて、この恋人達がいつ、どこで密会するかを知ったら、こっそりと私に知らせて欲しいのだ。

ペドリンガーノ かしこまりました。旦那様。

ロレンゾー そうすれば、私の気持が寛大であることもわかるだろう。妹よりはお前の力になってやれるぞ。賢くなって、私を失望させるではないぞ。彼女の許へいつものように行って、留守にして叱られないように仕事をしておれ。

〔ペドリンガーノ退場〕

そうだ、悪だくみではなく劔の力でやるんだ。言葉が役に立たぬのなら、力にこそ効果がある。しかし、金の力は何にも増して強いものだ。

王子、この計画はいかがでしょうか。

バルタザー 立派でもあるし、まずくもある。嬉しくもあれば悲し

くもある。恋の邪魔者が誰であるかがわかったのは嬉しいのに、私の恋する彼女が私を憎むようになるのではないかと思うと悲しい。誰に復讐をすればよいかがわかったのは嬉しいのに、もし私が復讐をすれば、彼女は私から離れて行くと思えば悲しいものだ。しかし私は復讐をしなければならぬ。そうでもなければ、かなわぬ恋に身を殺すしかない。ホレイシヨは私の宿命にかかわる呪いの人物だ。まず第一に、彼は私に剣を振りかけて来た。その剣で彼は勇敢に闘い、その戦の中で、私に深手を負わせたのだ。その傷で私は彼に捕われ、捕われの果ては彼の奴隷となったのだから。そして今は、その口から楽しい恋の歌を歌い、それが甘ったるい恋の思いを宿し、その好意がずるい計略に捕えられ、それがベルイムペリアの耳を喜ばす。耳を通して心まで、彼女の心には彼がいる。そこへこの私が入り込まねばならぬのだ。こうして彼は私の身体を力づくで奪い、私の恋するベルイムペリアの心を奸計で誘おうとする。しかし、私は彼を倒すためにはこの運命を賭け、命を失うか、恋を得るかに身を賭けることにしよう。

ロレンゾー 参りましょう、王子。ぐずぐずすれば復讐も遅れますよ。私について来るだけでよいのです。そうすれば恋を得られますし、妹の心も、奴を殺してしまえばすぐに貴方の方へなびきましようよ。

第二場

〔ホレイシヨ、ベルイムペリア入る〕

ホレイシヨ さて、ベルイムペリア様、あなたの愛の告白で、二人

の間に恋の花が咲き始め、私達の心は、そぶりでも、言葉でも、愛を感じているのに、それも、これ以上は望めそうもない二つの喜びの源なのに、この恋の喜びの真只中で、どうしてそんな苦悩の色を顔に現わしていられるのですか。

〔ペドリンガーノ、王子とロレンゾーにすべてを見せる為こっそりと二人を導いて来る〕

ベルイムペリア ねえ、私のホレイシヨ様、私の心は海の上に漂う舟に似て、おだやかに停泊する港が欲しいの。嵐に傷ついたところを早く治してしまいたい。浜辺に寄せて喜びの歌を歌いたいですわ。苦痛のあとには楽しみが、苦悩のあとには倅せが訪れますように。貴方の愛を得ることだけが私の憩いになるの。そこで私の心は、恐怖と希望に長いこと揺れ動き、いつでも憩いの場を求め、なくしてしまった喜びを取り戻したいと思っていますのです。そして静かに坐って、キューピッドのコーラスで「こよなき倅せは愛の望みの王冠よ」と歌いたいですわ。

〔バルタザーとロレンゾー、上の方に出る〕

バルタザー おお、眠れ、我が眼よ。私の恋人が犯されるのを見るではない。

おお、聞くな我が耳。彼らの声を聞いて失望をしない為に。

心よ、死んでしまえ。お前の心の代わりに別の人間が喜びを得ているのだ。

ロレンゾー わが眼よ、見張れ。この恋人達を引き離すまで。

わが耳よ、聞け、この二人が歎きに暮れるまで。

生きよ、わが心。たわけたホレイシヨが倒れるまで。

ベルイムペリア ホレイシヨ様、どうして黙ってらっしゃるの。

ホレイシヨ 言葉が少なければ少ないほど、私の思いは深まります。

ベルイムペリア しかし、一体何をそんなに考えてらっしゃるのでしよう。

ホレイシヨ 過ぎ去った危険、来たるべき楽しみをです。

バルタザー 過ぎ去った楽しみ、来たるべき危険をだ。

ベルイムペリア どんな危険、どんな楽しみをですの。

ホレイシヨ 戦場での危険、恋の楽しみをです。

ロレンゾー 死の危険だけで、楽しみは何もなくなるぞ。

ベルイムペリア 危険は去らせましょう。貴方の闘いはもう私との闘いなのです。だけど平和の誓いを破らないようなそんな闘いですわ。

愛の言葉を聞かせて。私もそれに愛の言葉を返しますから。

私を優しく見つめて。私も優しく貴方を見つめますから。

恋の詩を書いて。私もお返しに恋の詩を書きますから。

私に口づけをして。私も貴方にお返しに口づけをしますから。

こうして、闘いを平和に、平和の闘いにしましょう。

ホレイシヨ いとしいベルイムペリアよ。場所を探して、この闘いの最初の場へ参りましょう。

バルタザー やましい悪者めが。何て図々しい男だろう。

ベルイムペリア それでは、貴方のお父上の東屋へ参りましょう。あ

そこは私達二人がお互いの愛を楽しく誓い合った場所だから。宮廷では危いですわ。あそこなら安心です。⁽³⁰⁾ヴェスパーの出る頃、

家では皆が疲れ切っている頃です。その時なら鳥以外は誰も私達に気づきはしませんから。たまたまやさしいナイチンゲールが、私共の気づかぬうちに、私共にお寝みの歌を歌ってくれ、胸の痛みをこらえながら私共の喜びと楽しい恋のひと時のために歌を歌ってくれますわ。⁽³¹⁾その時までの一分一秒が一年以上にも思われま

すわ。

ホレイシヨ では、やさしく、気高い恋人よ、今すぐにお父上の前へ戻りましょう。われらの楽しみにあらぬ疑いがかけられないように。

ロレンゾー 見ていろよ。羨望と蔑視とを織り混せて、永遠の暗黒の世界へお前さんを送り込んでやるからな。

〔皆退場〕

第三場

〔スペイン王、ポルトガルの大使、キプロスのカスティル公ら入る〕

王 カスティル公よ、そちの娘ベルイムペリアは、ポルトガル王子の愛をどう受けとめているのじゃ。

カスティル公 性分にふさわしく、はにかんでいまして、王子を愛していることを隠してはいますが、間違はなくそのうちに受け入れることであります。仮りに傾いてはいなくても、勿論そういう事はあるべくもないことですが、ここに及んでは私の言うことを聞き入れることであります。彼を愛すか、さもなければ、私の愛を失うか、と言ってやりましたから。

王 それでは、ポルトガルの大使殿、帰られたら、太守に、この結婚を纏めて、締結されたばかりの盟友関係を一層強力なものに致しましょう、と伝えて下され。友好を保つに、これより良い方法はござりますまい。彼女の持参金は多額で豊かにしましょう。それに加えて、彼女は、キプロスの余の弟、カステイル公の娘でもあります、余の王位の後継の権利も半分程持つて居り、その土地の半分を将来自分のものにする事になっておる。余も伯父として彼女にお祝いをあげよう。それは、この縁組が整ったならば、納める筈になっておる貢ぎ物を免除し、もしバルタザー王子によって男児を得たら、余を襲つてスペインを統治させよう。

大使 ははあ、帰りまして太守にその旨申し伝え、私の助言がお役に立ちますならば、そのように事が運ぶように尽力致します。

王 そうして下され。それに、もし太守が承諾あれば、結婚の儀式に参列する為当地へ参られるのをお待ちしているとお伝え下され。その日を決めて下さるようになりますぞ。

大使 その他にも何かお命じになることがございましょうか、陛下。

王 太守によりしくお伝え下さい。では御機嫌よう。ところで、別れの挨拶をするのに、バルタザー王子は何処におられるかな。

大使 陛下、すでに御挨拶は済ませておきました。

王 覚えておいて頂く中でも、とりわけ王子の身代金はお忘れなく。あれは私のものではなく、王子を捕虜としたもの、つまりその勇敢さへの報酬に当てますのでな。ホレイシヨ、すなわち、われらの元帥の息子のものですからな。

大使 私共の間ですでに金額も決めましたし、できるだけ早めにを送りすることに致します。

王 では、今度はさらばですじや。

大使 カステイル公、その他の方々も、さらばでござります。

〔退出〕

王 さて、弟よ。お前はいささかの努力をして、娘ベルイムペリアの気持を変えさせねばなるまい。娘心というものは、肉親の情にはほだされ易いものじゃからな。

王子は物柔かで、娘を愛しておる。もし彼女が彼を袖にして、その愛を受け入れねば、自分の分だけでなく、わしからの贈り物としての王位継承もだめになってしまうからのう。そこでじゃ、わしが王子にできる限りの歓待をしているうちに、お前の娘の気持を王子に傾けさせてはくれまいかのう。彼女がこの努力を無にすることにでもなれば、すべてが駄目になってしまうからな。

〔皆退場〕

第四場

〔ホレイシヨ、ベルイムペリア、ペドリンガーノ入る〕

ホレイシヨ いやいよ夜のとばりが下り始め、昼間の光をかげらせた。暗がりのその中で楽しい時がやって来る。さあ、ベルイムペリア、東屋へ参りましょう。そこで楽しい夜のひと時を過ごしましょう。

ベルイムペリア 貴方に従いて参りますわ、私のいい人。もう引き退りません。たとえこの憶病な心がひるんでしまっても。

ホレイシヨ ペドリンガーノは大丈夫でしょうか。

ベルイムペリア ええ、彼は気心の知れた友人みたいなものですから。ペドリンガーノ、向うへ行つて、何かが起こったら、すぐに私に知らせておくれ。

ペドリンガーノ〔傍白〕 見張りをする代わりに、この二人の所へロレンゾ様をお連れして、たんまりお金をせしめてやるぞ。

〔退出〕

ホレイシヨ どうかしましたか、私の恋人。

ベルイムペリア どうもした訳ではないのですが、何か不吉な予感がしますの。

ホレイシヨ そんなことは言わないで、幸運がわれらの味方をし、天がわれらに夜を与えて楽しませてくれるのだから。星さえもその輝きを減らしていますよ、ねえ。ルナ⁽³²⁾さえわれらの為に身を隠しています。

ベルイムペリア そうですわね。私の疑念を払い除けましょう。そして貴方の優しさとお勧めで、恐怖にふるえる私の心を慰めますわ。もう大丈夫、貴方のことだけを考えますわ。坐りましょう。ゆっくりしないと楽しみも薄れますわね。

ホレイシヨ 貴女がここに坐れば、フローラ⁽³³⁾がもつとたくさんの花をこの場に咲かせてくれますよ。

ベルイムペリア でも、フローラがここにホレイシヨ様を見つければ、嫉妬に駆られて、私が側に寄り過ぎていると思いますわ。

ホレイシヨ 耳をすませてごらんさい。貴女が側にいるから、鳥だって暗闇の中で囀^{さえず}っていますよ。

ベルイムペリア いいえ、キューピッドがナイチンゲールを真似て、ホレイシヨ様のお話に甘い音楽を添えているのですわ。

ホレイシヨ ほんとにキューピッドが歌っているのなら、ヴィーナス⁽³⁴⁾がすぐ側に来ていますよ。ああ、貴女こそそのヴィーナスだ。それとも、もつと綺麗な星なのです。

ベルイムペリア もし私がヴィーナスであれば、貴方はマルス⁽³⁶⁾でなきあ。そうなれば、戦争が必要ですわ。

ホレイシヨ では二人でその戦争を始めましょう。手をお出しなさい。私の手と争うために。

ベルイムペリア まず貴方の足で私の足を押して下さいな。

ホレイシヨ その前に貴女の眼を見せて下さい。

ベルイムペリア それでは気を付けてね。私が口づけの矢を放ちますわよ。

ホレイシヨ こんな具合に、私は貴女の矢に報いますよ。

ベルイムペリア いいえ、それでは戦いの栄光を得る為に、私の絡みついた腕が貴方をとりこにしますわ。

ホレイシヨ いいえ、私の腕の方が大きくて更に強力です。こうすれば蔦に絡まれた榆の木だつてすっかり倒されてしまうでしょう。

ベルイムペリア そうして頂戴。もうどうなってもいい。情熱に死ぬるなら。

ホレイシヨ 一寸待って下さい。一緒に死にましょう。すれば、貴女が倒れても、私を殺してしまうことになりましょうから。

ベルイムペリア そこにいるのは誰。ペドリンガーノ！裏切られた

んだわ。

〔ロレンゾー、バルタザー、セルベリンとペドリンガー、変装して入る〕

ロレンゾー 彼女から離れる。彼女を離せ。おお、控えておられよ。貴方の勇気は先刻承知だ。各々方、すばやくやってくれ。

〔東屋でホレイシヨの首を、吊られた縄に懸ける〕

ホレイシヨ どうするんだ。俺を殺す気か。

ロレンゾー こんな具合にな。これこそ愛の結末だ。

〔暴漢共ホレイシヨを劔で刺す〕

ベルイムペリア ああ、彼の命を助けて。代わりに私を殺して。彼を助けて、お兄様。助けて、バルタザー様。私、ホレイシヨを愛してたわ。だけど、彼は私を愛してはくれなかったのよ。

バルタザー しかし、バルタザーはベルイムペリアを愛している。

ロレンゾー 彼の人生は常に野心に燃え、高慢だったが、今では一

番高い所に吊るされて死んでしまったわい。

ベルイムペリア 人殺し。人殺し。ヒエロニモ、助けて。

ロレンゾー さあ彼女の口をふさげ。追っかける。

〔皆退出〕

第五場

〔ヒエロニモ、寢間着に何かを一寸羽織って出る〕

ヒエロニモ どうしたのであろう。私の寢間に叫び声が聞こえ、危険を感じたことが無く、勇気をそがれたこともない私のこの胸が、こうもわなわなと恐怖にふるえているのは。ヒエロニモ、と

叫んだのは誰だ。私はここにいるぞ。眠ってはいなかったのだから夢ではない筈。いや、女の叫び声のようでもあった。それもこの庭の中で叫んだのだ。この庭で彼女を救ってやらねばならないのだ。だが、待てよ。これは一体どうしたことだ。人が吊り下がっていて、殺人者は影も形も見えない。それも、わしの東屋で、わしに汚名を着せるとは。この建物は楽しみのために建てたもので、人殺しのためのものではないのに。

〔吊られた死体を縄を切って下ろす〕

この人の着ているものはしばしば眼にしていたぞ。あれっ、ホレイシヨだ。わしの可愛い息子だ。いや、ちがう、かつてのわしの息子だ。おお、寢床からわしを呼んだのはお前であったのか。おお、命の一かけらでも残っていたら話してくれ。わしはお前の父親じゃ。誰がわしの息子を殺したのじゃ。人でなしのどんな獣が、お前の汚れない血を呑み込み、血まみれになったお前の死体をこの場に遺し、私はといえば、こんな暗い、死の影の中で、涙を流してお前を濡れさせたのだろうか。

おお、天よ、何故に罪を宵闇で包まれるのか。昼間であればこんなに陰惨な殺人も行われなかっただろうに。

おお、大地よ、何故にお前は、この聖なる東屋をけがれさせた者を滅さなかったのだ。

おお、可哀想なホレイシヨ。これから第二の人生が始まろうという時に、命をなくしてしまうとは、一体何をしたというのだ。

おお、よこしまな殺人者よ、一体お前は誰なのだ。美德と美点の持ち主を一体どうして殺したのだ。ああ、このわしは、可愛い

息子、ホレイシヨを失くしてしまつて、喜びも失せた哀れな老人になつてしまつた。

「イザベラ入る」

イザベラ 夫がいないと心配だわ。ヒエロニモ。

ヒエロニモ こちらだ、イザベラ。歎きに加わつてくれ。溜息も出なくなつた。涙ももはや枯れ果ててしまつた。

イザベラ ああ、何という悲しみ、息子のホレイシヨが。ああ、一体誰がこの果てしない悲しみを生み出したのです。

ヒエロニモ 誰がやったかがわかれば、悲しみも幾分かやわらう。復讐をすれば心も安息を見出させるだろうからな。

イザベラ それでは、死んだのですか。息子が死んだのですね。お、涙よ、湧き出せ。泉のように、洪水のように涙よ流れよ。溜息よ、吹き荒れよ。そして永遠に続く嵐を呼びおこせ。激動こそ私達の呪われた惨めさにふさわしいものです。

ヒエロニモ 優しい、可愛いバラの花よ、咲ききれないうちに摘まれてしまつた。立派な、氣高い息子よ、闘いには敗れずに、反逆に殺されたのだ。お前に口づけをさせてくれ。涙も枯れ、言葉も絶えてしまつたのだ。

イザベラ お前の眼を閉じさせてあげましょう。この眼だけがかつては私の喜びであつたのに。

ヒエロニモ この血塗られたハンカチを見たか。復讐が済むまではこれを手離さないぞ。まだ生々しい血が流れ出るこの傷を見たか。復讐が済むまでは墓場に埋めないぞ。それから悲しみの只中に喜びを見出だそう。その時まで、私の悲しみを忘れたりなど決してしないぞ。

してしないぞ。

イザベラ 天は公明正大です。人殺しは必ず露見します。時こそは真実と正義を明らかにしてくれることでしょう。そしてこの反逆を明るみに出してくれます。

ヒエロニモ とに角イザベラ、お前の歎きを止めなさい。いや、せいぜい暫くの間でもそれを掩い隠しなさい。それから早速われわれは陰謀を^{あは}発き出して、一体誰がこんなことをやったのかを探るとしよう。さあ、イザベラ、息子を抱えてくれ。

「二人でホレイシヨの死体を持ち上げる」

この子を、この呪われた場所から家の中へ連れて行こう。この子の為に歎きの言葉（挽歌）を私が言おう。歌はこの場には似合わないからもう。

⁽³⁷⁾ 清き泉の生み出す薬草のすべてを調合せよ、私の苦痛を和らげるために。あるいは忘却の花を咲かせるために。

「ヒエロニモ、その胸に己の剣を当てる」

わしは自身で、太陽が光の浜辺にもたらすありとあらゆる呪われた種子を貯えておこう。魔法使の女が作り出すあらゆる毒薬を飲む。薬草の生み出すあらゆる毒薬も飲む。すべてこれらを試してみよう、五感のすべてが瀕死のわが胸の中から消え去るまで。従つて、わが愛する息子よ。お前の眼をわしが見ることもなからう。それに、永遠の暗闇がお前を葬り去ることであろう。お前と共にわしも死ぬ。こうしてわしも旅人のいまだ行きて戻らぬ国へ参るのじや。

それもそうじゃが、あわてて⁽³⁸⁾レーテの河を渡することは止めにして、お前の仇を討たねばならぬわい。

「ここで剣を捨てて、死体を運び去る」

第六場

〔アンドレアの亡霊並びに復讐神出る〕

アンドレア わたしの苦悩を増す為にお前は私をここへ連れて来たのか。私はバルタザーが殺されるものとはかり思っていたのに。それなのに、友人のホレイショが殺されてしまった。それに奴らは美しいベルイムペリアを欺いている。この私が世界中の誰よりも愛していた女性を。彼女も私を、何にも代えられぬ位に愛してくれていたのだ。

復讐神 苗のうちから収穫^{とろいれ}の話をして貰っては困る。すべては結末の仕上がり待つのだ。熟するまでは鎌は用いぬ。

静かに。この場から私がお前を連れ出す前に、悲しみの境遇にいるバルタザーを見せてあげよう。

(注)

(1) 冥界(ハデス)はプルトーンの世界である。イリアッドでは遙かな西の国であるが、後には地下にあると言われるようになった。永遠の暗闇の国で死者の霊が飛び交っている。その中にアケーロン(苦悩の河)はあって、コキュトス(悲歎の叫びの河)、フレゲトン(焰の河)、レーテ(忘れ水の河)、ステイクス(厭わしいものの意の河)と共に外界(地上界)からこの国をさへぎっている。

(2) ステイクス、及びアケーロン両河の老いた渡し守で、埋葬をされた死者の霊からいくらかの金を貰って、地下界へ漕ぎ渡す役目をもっていた。古人は埋葬の際、この貨幣を死者の舌の下に習慣として入れて置いたようである。また正当な埋葬を受けない人物は、カーロンの権限で渡しを拒否されていた。

(3) ネーレウスとドリスの娘で、マミドン族の王、ペーレウスと結婚して、アキレスを生んだ海の妖精のことである。ゼウスに選ばれてペーレウスとの結婚の儀式を挙げる時、祝宴に招待されなかったことを怒ったエリス女神がそこへ「最も美しき者へ」として投げ込んだ金色の林檎をめぐる、ヘーラ、アテネ、アフロディテ(ヴィーナス)の三女神が争いを起こし、パリス(トロイアのプリアムス王の子、この場での裁判官)に裁定をせよ、と命じたところ、世界一の美女を与える約束をしたアフロディテの言葉にまどって、パリスはアフロディテを最も美しい人と裁定したので、このためにヘレンを得て、後はトロヤ戦争の原因となったとされている。

(4) 南イタリア、ナポリ西方九マイル、クマエに近い、死火山の噴火口に近い湖であるが、有臭のガスが立ち込めていたために、ここが地下界への入口だと言われたり、たまには地下界そのものであるとも言われていた。

(5) 地下界の入口を守る、蛇の頭でできたたてがみのある三頭犬である。オルフェウスは竖琴でこれを眠らせ、アエネアスは眠り薬の入った蜜菓子を与えた。ヘラクレスはその果した十二の難業の最後のものとして、地下界へ下りて、素手でこの犬を捕え、地上界へ連れて来たとされている。

(6) ゼウスはフェニキアの王女で、カドムスの姉妹にあたるエウローペに心を奪われたので、純白の牡牛に身をやつし、王の牛の群に紛れ込み、彼女の気を惹きつけ、背中に乗せてクレタ島へ行き、ミノスとラダマントスを生ませた。子供達は公正な人物であったので、法律を制定し、死後には地下界において裁判官となった。

(7) アッティカ地方の一島アイギナ島の王であった。その正しい支配のゆえに、死後は地下界で、ミノス、およびラダマントスと共に裁判官に任命された。

(8) 注(6)を参照。

(9) トロイアの王・プリアムスと妃・ヘキューバとの息子で、アンドロマケの夫であり、トロイア軍中で最も勇敢な将軍であったが、不死身といわれていたアキレスに殺された。

(10) トロヤ戦争におけるギリシア聯合軍の中の最も有名な英雄で、テッサリアの王・ペーレウスと海の女神・テティスとの間に生まれた子供。

(11) テッサリアの一種族であり、アキレスの支配を受けていた。因みにペーレウスはマードン族の王であった。

(12) ここに言うプルターとは、ギリシア神話のハデスを意味する。もとハデスは地下界を支配していたが、その支配する地下界そのものを意味するようになった。ギリシア神話では、このハデスが時折、プルターンと呼ばれて混同されていた。ローマ神話におけるプルターのこゝとである。ギリシア神話ではその他に、オリュムポス山の神々の主神がゼウスであり、海神をポセイドンと言うがいずれも兄弟神である。ローマ神話では、それぞれデュピター、ネプテューニウスと呼ばれる。プルターンの奥方はペルセフォネ(ローマ神話ではプロセルピナであるが、これまではギリシア神話の引用が多かったが、ここでは地下界の話はローマ神話の人物を引き合いに出している。つまり、ギリシア神話とローマ神話が混同されて引用されている点には注目する価値がある。

(13) 原文ではフュアリーズで出ているが、これも(12)同様ギリシア神話に於いては、エリニュエスのことである。ウラノスがゲー(大地)によって得た子供達をタルタロス(暗陰の地下界)へ投げ込んだので、ゲーが怒って、タイタン達にその父を襲わせた。ウラノスが子供達に去勢された際に、滴り落ちる血をうけて、ゲーがはらんで生まれたのが復讐女神達と巨人達であった。

罪、特に血縁の絆に反逆する罪を犯した人間の心を苛責し、呪いを実行する。また人間に飢餓、病弊を与えとも言われていた。報復の速さを示す翼を背中に負った、いかめしく、醜い女の姿をして、たまには蛇を身に絡ませてもいた。その報復は地上界から地下界へまでも、未来永劫に続くものとされている。アレクトー、メガエラ、ティシフォオーネがその名前であり、初めは二名であったようであるが、エウリピーデスが三名にしたと思われる。エウメニデス(やさしい人々)という皮肉な呼び名をつけて、彼らの怒りを静めようとしたこともあったようである。

(14) イクシオンは、ゼウスの妹でその妻となったヘーラーに恋し、彼女を犯そうとした。ヘーラーの告げ口で、ゼウスは真相を知るために、ヘーラーの姿を「雲」で作し、イクシオンの脇に寝かせた。ヘーラーと交じわったと信じ込んだイクシオンはそれを誇っていたので、ゼウスは彼を地下界の車輪に縛りつけて、空中の風によって永遠

に引き廻されて、ゼウスから罰されることになった。そして「雲」はイクシオンによって、ケンタウロス達を生んだのである。ギリシア神話にはこの種のゼウスによる罰は数多く出てくる。シーシュポス(シジフォス)もその良い例である。つまり、ゼウスがひそかにアーンポスの娘・アイギーナをさらった時、娘を探し求める父親にその次第を教えてやったから、死後の地下界に於いて、手と頭で岩を押し転がし、坂(または山)の向う側へ運び上げるといふ努力をする罰をうけたが、いくら押しつけても岩は再び元へ戻るものである。人間の一生にいみじくも酷似したこのような話は数多いが、「原罪」の意識などもこうした点にある程度相似した点から作り出されたものではないであろうか。

(15) ペルセフォネのことである。農耕・収穫の女神デメテル(ロ・神・セレス)はゼウスによってペルセフォネ(プロセルピナ)を生んだ。牧場で花摘みに夢中になっていたペルセフォネを、地下界から突然出て来たプルターン、又の名ハデス(ロ・神・プルター)が妃にするために彼女を車で連れ去った。ゼウスは探し求めていたデメテルに「もし彼女がまだ何物をも食べていなければ地上界へ戻してあげよう」というのであった。ところがすでに地下界で彼女はプルターンの妻となり、「禁断の木の実」を食べていたので、ゼウスは調停をして、一年のうちの $\frac{1}{3}$ (または $\frac{1}{2}$ とも、 $\frac{1}{4}$ とも言われる)を地上界で母と共に暮らせるようにしたとされている。普通は、まちがいに廻って来る春を美しく象徴する人物とされている。

(16) ギリシア伝説によると「象牙の門」からは、「はかない夢」が出て来、「角の門」からは「正夢」が通るとされている。

(17) ギリシア・アッティカ悲劇の起こった、つまりディオニュソスの酒神をアクロポリスの岩山の下に祀った際に、悲劇の言葉そのものが示すように、「山羊の歌」と一般に知られているのがギリシア悲劇である。その中で初め、五十名から成る合唱隊がいたことを考え合わせると、英国古典悲劇にはかすかにその名を止めているにすぎない。しかし、もともと少ない俳優と、大多数の合唱隊から成っていたギリシア悲劇の中ではクロス(コラス)は絶対的存在であった。この「ス・ペイン悲劇」ではわずかに二人(?)のクロスしか出ていないが、見物の役目と、古来から伝統的な信仰に基づく運命の変遷への、絶対的な見張り役・推進役をも兼ねているのである。シエキクシアとの明確な相違がここでは見られると言うことができる。

- (18) ギリシャ神話に於けるアレス（軍神）にあたるローマ神話のマルス神、の妻、または妹とされる。
- (19) ラテン語二行入る。
- (20) ラテン語三行入る。
- (21) 北大西洋上にあるアゾレス群島の中の島、現在はポルトガル領になっている。
- (22) 後代では多く復讐神と見做されているが、ギリシャ、ローマでは、正義と公憤の女神で、人間に対する賞罰の配分をつかさどり、節度を破る者を憎み、特に神々に対する人間の傲慢を罰した。この戦闘の場に出て来ると何か一寸場違いなことを感じるようである。一説によると、ゼウスとこのネメシスの間に、絶世の美女ヘレネーが生まれたとある。ネメシスがゼウスとの交じわりを遁れて鷺鳥に身を変えたと、ゼウスも白鳥の姿を借りて、彼女と交じわったという。その結果、卵が生まれると、ある羊飼いがこれを聖林の中で見つけて、レーダーの所へ持参する。彼女はこの卵を箱に保存しておくうちに、時間が経ってヘレネーが生まれ、それを自分の娘として育てたという。それがのちにトロヤ戦争の発端へと進展して行ったといわれている。
- (23) アテナ女神（ロ・神・ミネルヴァ）の添え名。トロヤ戦争ではギリシヤ方の味方をした。「不和の林檎」で世界一の美女をアフロディテであると裁定したパリスに対する神としての怒りのせいであろう。
- (24) 堂々と誇り高く聳えるトロイの城塞。
- (25) エドワード三世の第四子で、ランカスター家の始祖。ランカスター公のことである。（一三四〇～一三九九）ヘンリー四世の父にあたる。
- (26) イングランド南部の断崖の白さをローマ軍によってこう呼ばれた、古いイングランドの名称（L・アルプスから）である。
- (27) 森林の神で羊飼や狩人の保護者であるが、上半身は老人で下半身は山羊である。蘆から羊飼の笛を発明した。人里を離れた荒涼とした土地を旅する人達に突然の恐怖をまき起こすとも言われていた。アポロン神（青春と美の典型）とパン神との音楽競技では、フリギアの王・マイダスがアポロンの負けを宣したためアポロンは怒って、マイダスの愚かさを示すために、彼の馬を驢馬の耳につけ代えたが、そのことを理髪師が知って、耐えられずに地面に穴を掘り、「王様の耳は驢馬の耳」と言った。するとそこから芽を出した蘆が風に吹かれる度

- 毎にその言葉を繰り返した、という話もある。
- (28) アテナ女神が作った横笛を、吹く顔は醜いといって笑われ、その笛に呪いをかけて捨ててしまった。それを小アジア・フリギアの半人半獣神のマルシヤスが拾って練習を積み、慢心してアポロンに笛の競争を申しこみ、ミューズ女神らの審判によって負けを宣告され、生きたまま皮を剥がれた、という。
- (29) ローマ神話におけるクビドーでウオルカヌスとウエヌスの息子、ギリシヤ神話におけるエロスの焼き直しである。「情欲」「熱望」の擬人化で、詩に於いては、「恋は盲目」と言うように、盲目、あるいは、目かくしをしたものとして歌われる。ラテン作家・アプレイウスの「金色の驢馬」の中に挿話として出て来る。人間の魂の象徴としての美少女・プシユケーを愛し、彼女の方は様々の試練の後、母神ウエヌスにも気に入られ、神性を与えられてクビドーの妻となり「喜び」と言う名の女兒を得た、ということになっている。
- (30) すなわち、ヘスペルスであり、宵の明星のことを言う。ヴィーナスは宵と、あけの明星として理解されている。
- (31) 「ロミオとジュリエット」に「その時までが二十年にも思われますわ。」という科白がある。（II・11・百七十行目）
- (32) ギリシヤ神話ではヘリオスの妹・セレネに当たる。月の女神である。エンディミオンはアイオリア人の王アイオラスの孫と言われ、小アジア・カリアのラトモス山で眠っているのをセレネが見て、恋心を起こし、美しさを失わないように永遠の眠りにつかせ、夜毎にその姿をのぞきに來た、という。
- (33) サビヌス人系の女神で、春と花とを支配し、果実の豊作を守った。青春と喜びの女神とも考えられていた。ギリシヤ神話のアテナの誕生にも負けない奇蹟を行なうつもりで、デュノーは、花の女神フローラの魔法の草に触れて、マルス神をはらみ、生んだと言われている。
- (34)(35)(36) 前注にくわしいように、キューピッドはヴィーナスの子供であり、恋の使者である。ヴィーナスはその母であるから傍にいます。ヴィーナスには金星の意味もある。すなわち、相手を宵の明星にたとえている。ペルイムペリアがヴィーナスならば、マルス、すなわち、軍神としての火星に近い。軍神が君臨すれば、闘いが始まらねば

ならない。それでは私達の闘いを始めましょう……となる次第。

ギリシヤ神話では、アフロディテ(ロ・神・ウエヌスⅡヴィーナス)はアレスからヘルモニアを、アレスカゼウス、もしくはヘルメスからエロスを、ヘルメスからヘルマフロディトスを、ディオニュソスからプリアポスを生んだとされている。人間界の情人にはアドニス、アンキセスがあつたといわれる。なお、断わるまでもないが、ローマ神話ではほとんどの話が、名前こそ違い、ギリシヤ神話の焼き直しであることは留意しておく必要がある。

(37) ラテン語十四行入る。

(38) 「忘却」の意の河である。地下界を流れる河の一つで、その水を飲めば、あらゆる過去の出来事を忘れるといわれていた。